う．一般に岡山に種痘を広めた人物として周知される抱節が，当初はそれに懐疑的であったことは，ここで初めて明かされることであろう．伝染病としておそれられた天然痘は種痘により落ち着きを見せたが，代わって安政5年（1858）にはコレラが日本全国で大流行した．それについては「暴病論」があり，コレラに対して民衆が祈祷に頼りがちとなる状況と，医家に対しては自戒の念を込め治療知識の不足と不勉強を戒めている．ここには喬木の医師としての誠実さと同時に向学心が顕れている．

「知人との交流に関する文章」では，漢学の師片山冲堂に漢文の添削を乞う文章が散見し，喬木が医学だけではなく，漢文の習熟にも熱心であったことがわかる．日本と外国との交流について記した「外国人との交流に関する文章」には，漢文について記した「文論」があり，それには朝鮮通信使や，幕末，西洋から来航した商人の方が，日本人より漢文の能力に長けており，「世儒動輒曰，文不必学，果然乎，古聖之道幾乎熄矣，吁生乎今之世，而欲尚友古之人者，其唯文乎（世儒は動もすれば輒ち曰く，「文は必ずしも学ばず」と．果たして然りや，古聖の道幾かして熄まん．吁，生まるるや今の世にして，古の人を尚友せんと欲する者は，其，唯文のみならんや）」（訓読は著者による）と，世の儒者は「漢文を学ぶ必要はない」などと言うが，古の聖人の道やすぐれた古人を友とすることができるのは漢文だけである，と漢文の重要性を説いている．これは今日漢文に接することを常とする人々も思いを同じくするところではないであろうか．

本書は『神内喬木文集』の訳注以外の章も充実している．第一章では神内氏の歴史と喬木とその子孫，また居住地域についての解説があり，第三章の参考資料には文集収載以外の喬木の文章や喬木宛の詩文の訳注，と文集の書影に加え，「神内家関係者略歴」「関係図」「神内喬木年譜」の三節がある．

関係者略歴には『喬木文集』に登場する人物や，喬木と直接関わった師，師友ばかりでなく，間接的に影響を受けたと思われる人物，また歴代の藩主，同時期に活躍した医学，漢学者も収載されている．関係図は「神内喬木を中心とする学統・交流図」と「神内家と親戚関係図」に分かれ，学統交流図は喬木を拠点として，直接の師からその学派の祖まで遡り，医学，漢学の一大師承図となっている．その図からは喬木自身の医学，漢学における位置のほか，医学史，漢学史上の著名な人物たちの意外な繋がりが見られ，発見がある．年譜は喬木と関わりの深い柏原家，難波家，片山家の事項のほか社会的事項など，略歴，関係図と同様にして喬木と直接的に関係しない事項についても記載され，喬木の生きた時代が具体的に知ることができる．

本書は，神内喬木という一地方の医家の文集の訳注書という域を超え，近世後期から明治にかけての学術の継承関係が知られる大変有意義な資料集ともなっており，斯学の研究者には座右の一書とされたい．

（清水　信子）

［神内國榮，〒761-0704 香川県木田郡三木町高岡四條1831，2020年3月，B5判，370頁，3,000円＋税］

Henderson, JK

“Arthur Schüller: Founder of neuroradiology. A life in two countries.”

医学の歴史には，どのような人物が記録されるべきなのだろうか．著名な人物を挙げるとすれば，古い時代には，西洋で言えばヒポクラテス，ガレノス，ヴェサリウス，ブールハーフェのように，日本で言えば曲直瀬道三，山脇東洋，杉田玄白と前野良沢，華岡青洲のように時代を画する

ような人物がいる．近代初期でも，生理学のミュラーとベルナール，病理学のフィルヒョウ，細菌学のパスツールとコッホのように，また高木兼寛，北里柴三郎，呉秀三などなど傑出した人物が思い浮かぶ．しかし現代に近づいてくると医学研究も医療も高度化・巨大化して，個人の業績が目立ちにくくなり，仕方なくノーベル賞の受賞者といった基準を用いるのかも知れない．医学史上の著名な人物を集めた事典がいくつかあり，古くはHirsch A（ed）“Biographisches Lexikon der hervorragenden Aerzte aller Zeiten und Völker”（1884–88）や，最近ではBynum WF, Bynum H（ed）“Dictionary of medical biography”（2007），日本では泉孝英（編）『日本近現代医学人名事典』（2012）などが参考になる．

歴史上の人物を評価することはなかなかの難事である．新しい資料の発掘や研究によって日本史の教科書の内容が変化したり，明智光秀の人物像が再評価されたりしたのも記憶に新しい．医学史上の人物についても，業績や後世への影響の大きさを何らかの基準によって客観的に評価するのは絶望的である．むしろ記憶に残るという点から見れば，その人物がどれほど尊敬されたかという人格や人間関係のようなもの，また次の世代の人々がその人物についてどのように語り継いだかという物語のようなものが，重要なのではないだろうか．

本書は，オーストリアとオーストラリアで活躍した神経放射線学者アルトゥール・シュラーSchüller, Arthur（1874–1957）の生涯を，弟子であるセント・ビンセント病院外科医のキース・ヘンダーソンHenderson, John Keith（1923–2017）がその子息マイケルHenderson, Michael Aの協力を得て上梓したもので，本年2月に刊行された．シュラーはウィーン大学医学部で神経学と放射線学を学んで「神経放射線学neuroradiology」を創始し，その名は，頭蓋のX線撮影におけるSchüller法（外側上方から照射して顎関節や乳突蜂巣を観察する）や，Hand-Schüller-Christian病（ランゲルハンス細胞組織球症），Schüller現象（片麻痺患者が歩行するとき，機能性疾患の場合には健常側へ，器質性疾患の場合には麻痺側へ曲がる現象）に残されているが，その業績は医学史においてとくに目立つほどのものではなかった．しかし本書ではシュラーという人物が，20世紀前半の世界の激動の中で翻弄されながらも，ヨーロッパとオーストラリアという2つの大陸で医学者として歩んだ生涯が物語られ，人の心に強烈に訴えかけてくるものがある．刊行されたばかりの英文の著作であるが，医学史上に名を残す1人の医師が，まさにここから生まれると予感し，紹介する次第である．

シュラーは1874年12月28日に，ハプスブルク帝国下のブリュン（現・チェコのブルノ）に生まれ，ウィーン大学医学部で学び（1894–99），ウィーン小児病院の神経学のレートリッヒRedlich, Emil教授のもとで助手になり（1902），ウィーン総合病院放射線科のホルツクネヒトHolzknecht, Guidoと共同研究を行った（1902）．1904年にはウィーン大学の私講師となり，X線研究の成果を『レントゲン像での頭蓋底Die Schädelbasis im Röntgenbilde』（1905）として出版した．その後は順調な日々を過ごし，公的には1907年に講師に昇格，『頭部疾患のレントゲン診断Röntgen-Diagnostik der Erkrankungen des Kopfes』（1912）とその英訳（1918）を出版，1914年に教授に就任した．私生活では1906年にマルガレーテStiassni, Margareteと結婚し，1908年に長男フランツFranz，1909年に次男ハンスHansが誕生した．

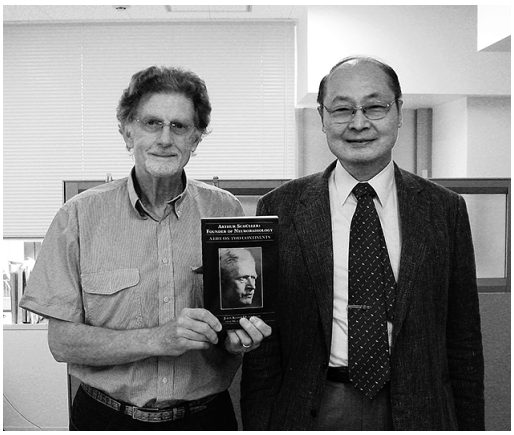
順風満帆のまま63歳を迎えたシュラーの人生は，1938年3月12日のナチスによるオーストリア併合で暗転した．ニュルンベルク法がオーストリアにも適用され，ユダヤ人の権利と活動が厳しく制限された，大学ではナチスを支持する解剖学教授ペルンコップPernkopf, Eduardが学部長となり，シュラーを含めユダヤ系の教員を4月に解職した．ユダヤ系の多くの同僚が早々に海外に脱出する中で，シュラーはなおもウィーンに残留していた．11月9–10日の「水晶の夜Kristallnacht」には，ドイツとオーストリアの各地で組織化された反ユダヤ主義暴動が発生し，シナゴーグやユダヤ人商店・企業が破壊・略奪され，シュラーも襲われて負傷した．多くのユダヤ人は海外に脱出する費用

を工面することができず，その後に強制収容所に送られることになった．

シュラー夫妻は1939年1月にオーストラリア政府から滞在ビザを得た．出国のために必要な旅券を4月14日に獲得し，オックスフォード大学の外科教授ケルンスCairns, Hughの招きでイギリスに赴き，しばらく滞在した．7月24–28日にアントワープでの神経放射線学シンポジウムに出席し，そこからオーストラリアへと旅立った．8月に到着後間もなく，シュラーはメルボルンのセント・ビンセント病院の放射線部で仕事を始めた．しかし長男フランツ，次男ハンスとその妻と娘は，オーストリアに残留し，強制収容所に送られて1944年までに死を迎えた．

シュラーは1956年10月9日まで，セント・ビンセント病院に務めた．本書の著者のヘンダーソンは，この時期にシュラーと出会い，教えを受けた．シュラーは1957年10月31日に80歳で亡くなったが，1972年まで妻は存命した．ヘンダーソンがシュラーの生涯について調査を始めたのは，セント・ビンセント病院を退職した直後の1980年代末であった．シュラーは退職後の病院に書籍は残したが，自身の記録の類はほとんど残さなかった．ヘンダーソンは，シュラーを知る人たちと面談し，さまざまな記録を発掘していった．その多くは時間の経過と，戦争中のオーストリアの社会インフラの破壊によって見失われていた．シュラー自身が残したのは学術的な報告のみで，個人的な記録や手紙を残さなかった．シュラーが生前に著者に語っていた個人的なできごとは，この本を書き進む間に一つの物語へと浮かび上がっていった．著者は2012年頃までに本書を書き上げていたが2017年に死去し，最後の仕上げをして出版へと導いたのは息子のマイケルである．

シュラーを記憶する人は，弟子のヘンダーソンだけではない．シュラーの死後40年を経た1997



年には，かつて親交のあったウィーン大学のシンドラーSchindler, Erwinが，シュラーの生涯と業績について米国神経放射線学会誌に寄稿している．

本書の出版には，オックスフォードのアンドリュー・シュラーSchuller, Andrewが，不思議な縁から少なからぬ協力をした．シュラーが1939年に半年ほどオックスフォードに滞在したときに，隣人にシュラーSchullerという人がいて名前が似ているので尋ねられたが，その時には分からなかった．アンドリューはその息子で，シュラーは大叔父にあたる．自分の家族の由来を調べているうちにシュラーに関心をもち，またメルボルン在住のシンドラーの友人経由で，ヘンダーソンと連絡をとるようになったという．私が本書を知ったのも，このアンドリューからであった．オックスフォード大学出版会に長年勤務していたが，現在は経済学者で東京大学の特任教授をしている奥さんと一緒に日本に滞在中であるという．先日私のオフィスを訪ねてこられて，シュラーについて，医学の歴史について話し合い，興味尽きない時間を過ごした．

（坂井　建雄）

［Melbourne: Hybrid Publishers, 2021, 204 pp, 23 cm.］